

20世紀メンズファッションとピエール・カルダンの功績

北 方 晴 子*

Men's Fashion in the 20th Century and Pierre Cardin

Haruko Kitakata

要 旨 ピエール・カルダン CARDIN, Pierre は1964年、宇宙をイメージした「スペースエイジ・ファッション Space age fashion」を発表し、一時代を築いた。そしてメンズファッションデザインにおいても新しいアイデアを持ち込んだ。これまでテーラーによる外形がどれも酷似したクラシックスーツしかなかったメンズファッションに、婦人服同様にデザインを加えるというそれまでの概念を崩したもので、メンズファッション史上において革新的な出来事であった。その背景には、20世紀後半に登場する新たな男性像と、カルダンのメンズファッションにおける更新が大きく関わっていると考えられる。男女平等の流れが進んでいた中、失われつつある男性性を強調しようという新たな試みがみられ、雑誌や広告などには男性が以前より取り上げられることとなる。そこに「オブジェとしての男性像」が誕生していたのである。

キーワード メンズファッション (men's fashion) 男らしさ (masculinity) ピエール・カルダン (pierre cardin)

はじめに

1960年代、ピエール・カルダン CARDIN, Pierre (1922-) による宇宙をイメージした「Space age fashion スペースエイジ・ファッション」は、その斬新なアイデアで一時代を築いた。そして彼は、20世紀のメンズファッションデザインにも大きな影響を与えた。1960年の初のメンズコレクションでは、それまでの伝統的な英国調スタイルに新しさを求めデザインした。コラン・マクドエル Colin McDowell は、著書の中で「20世紀で最も影響を与えた紳士服デザイナーである」と評し、それまで自らの容姿にほとんど興味がなく、ブティックに足を踏み入れることなど考えもしなかった男た

ちの意識を変え、紳士服の限界を広げたことに触れている。

1 未来派デザイナーの誕生

カルダンは1922年イタリアのヴェニスで7人兄弟の末っ子として生まれ、その後フランスのサン・エティエンヌ Saint-Etienne に移り住み育った。14歳でテーラーに入り技術を修得し、占領下の時代はヴィシー Vichy の洋服店マンビー Manby で見習い仕立屋として働いた。その後フランスがドイツに解放された1944年にパリに出て、J・パキャン PAQUIN, Jeanne²⁾ (1869-1936) のメゾンやE・スキヤパレリ SCHIAPARELLI, Elsa³⁾ (1890-1973) の下で短期間修行した。1946年には、オープンしたばかりのC.ディオール DIOR, Christian⁴⁾ (1905-1957) に入り、翌1947年2月に贅沢さと優雅さを髣髴させる

* 本学准教授 近現代メンズファッション、近現代ファッション史

「ニュールック new look」が戦後のモードを象徴する服として発表された時、彼はアトリエ主任として参画していた。カルダンは「はさみの魔術師」、「カットの天才」という異称が付けられていることからその才能は汲み取れる。その後3年間ディオールのもとで働いた。

1950年にディオールの店からわずかな資金で独立し自社を設立、当初は映画や劇場のコスチュームを専門とした。そして1953年、初めてのパリ・オートクチュールコレクションを発表する。ニュールックが流行していた当時、彼が発表したシルエットはその流れを汲むものだった。

そして、未来的で、シンプルかつ前衛的な要素を強く打ち出したモダン派リーダーとして一時代を築いたのは1960年代以降である。有名な「コスモコール・ルック cosmocorps look (1966年)」が発表され、ジッパーやメタリック、ビニール、エナメルなどを大胆に取り入れ、次々と未来的な志向の強い服を発表した(図1)。1966年のアポロ1号の打ち上げと同時に発表されたその宇宙ルックは、モダンでかつ大胆なデザインで宇宙服を連想させる。明るく未来を想像させるようなそのスタイルはそれま



図1 カルダンの作品 1968年

でのパリ・オートクチュールの伝統的なイメージとは異なり、女性の若さや活動性といった要素を強調した。

ちなみに日本では、1959年に高島屋の招きで来日し、モデル松本弘子(1936-2003)を見初め、店の専属にしたことは有名である。そして1960年代に入り、百貨店がカルダンの作品を輸入し始めた。

2 メンズファッションへの進出

1) 革新的デザイン

1960年、カルダンはクリヨンホテル Hôtel Crillon で初のメンズウェア・コレクションを発表したのをきっかけに、メンズファッションに進出した。それまでの伝統的な英国調メンズスタイルに、新しさを求めクリエイトしていくこととなる。さらに当時増えてきたプロのファッションモデルや、仕立屋が伝統的に使ってきたコメディ・フランセーズ劇場の俳優を使わず、学生をモデルとして雇った。このキャストは人々の好奇心をかき立てた。

「シリンダー(円筒)ライン Cylinder line」と呼んだこのコレクションは、襟無しの小さめの秋用コールテンジャケットや、夏用の縞のコットンジャケットがあった。これらのアイテムはやがてビートルズ The Beatles (1962-1970)により世界中で目にするようになる。

これまでのメンズファッションの分野では、これまでのクラシックスーツしかなかったテーラーの手による入念なカッティング、縫製、そして既制服はカッティングも縫製も機械に頼り、スーツの外形はどれも酷似し、デザインという発想は入り込む余地はなかった。しかしカルダンはそれを覆し、素材の見直しから婦人服同様の曲線の多用、ディテールにまでデザインを加え、円筒型シルエットのスーツを作りあげた。このことは、男のスーツにデザインという概念⁵⁾を持ちこんだファッション史上において革新的な出来事である。すなわち、クラシックスーツの新たな見直しとユニセックスファッ

ョンの普及に功績を残した。

2) メンズファッションデザインの展開

1961年、当時の大手既製服業者のひとつであったブリル Brill が初のピエール・カルダン署名入り既製紳士服ラインを発表した。

「カルダン現象」が順調路線に乗るのは約3年後のことである。そして1965年の「チューブ tube」コレクションの成功は国際的展開を確実なものとした。当時、50万人の男性がカルダン直販900店舗（国内店舗数は200、海外店舗数は700）のどこかで買ったカルダンブランドを着ていると推定された⁶⁾。

一方、ロンドンでは、1965年、サヴォイホテル Savoy Hotel で彼の初のショーが開催された。また、約400店舗を持つアソシエティド・テイラーズ Associated Tailors とのライセンス契約を交わした。アソシエティド・テイラーズはこれにより、デザイナー、ハーディ・エイミス Hardy Amies⁷⁾ (1909-) と契約を交わしたライバルで、多角経営テーラーとして知られたヘップワース Hepworths 社に挑戦した形になった。

こうして、ピエール・カルダンは、既製服を誰にでも身近に感じるラインとしてだけでなく、華やかなデザイナーブランドとして売り出した初のデザイナーとなった。

1959年にデパート、プランタンのためにプレタポルテコレクションを打ち出した時、オートクチュール界からは除名扱いを受けた。しかし彼は強い意志を貫き、メンズファッションにも進出していったのである。のちに皆がカルダンスタイルを模倣し始め、結局復任した。そしてメンズウェアの分野でもブランド既製服戦略を展開した時も、皆これまた積極的に彼のスタイルを真似た。そして、カルダンは1965年に「あらゆる分野の人々が通りで、職場で、ビーチでまたはスキリゾートで交わるこの時代に、ファッションデザインをエリートだけに限ることはもはや不可能だ。そして私の目標は、拡大しつつある一般大衆の意のままにデザイン

を役に立ててもらふことだ。」と述べ、作家、大使、俳優などアカデミーフランセーズのメンバーのために服をデザインした後、石工、肉屋、八百屋たちがカルダンスーツを洗礼、結婚式、宴会など特別行事のために買う様子を目撃し、お洒落であることはもはや少数派の特権ではなくなった証拠だと、カルダンは喜んで歓迎した⁸⁾。そして1966年『レクトゥール プールトゥー *Lecture pour tous*』誌で「男っぽいろくくすはもう古い。ライターから財布まで超スリムでなくてはならない」と宣言した⁹⁾し、細長いシルエットを普及させていった。

こうして「フランスライン French-line」は数年以内に、ニューヨークから東京まで世界のマスコミが、スマートな男性的スタイル、もしくは男性の「ニュールック new look」と呼んだものを体現した。この特徴は、狭い肩幅、高い袖穴、ぴったり合ったウェスト、そして切り込みのついた長めの裾であった。ズボンはハイウェストで、プリーツは無かった。

3) メディアの反応

1960年代中盤までにカルダンブランドは、フランス既製スーツのフロックコート気味の細長いシルエット「新ロマンチック neo-Romantic」を普及させていた。フランスのメディアはそれを「全ての男のダンディズム」と呼び、そして、『アダム・タイユール *Adam-Tailleur*』誌は1964年に「カルダンの男性ファッションはシャネル CHANEL, Gabrielle¹¹⁾ (1883-1971) の女性ファッションと同等に認知されている」と掲載し¹⁰⁾、その功績を高く評価していることがわかる。

また、ファリッドは著書の中で、男性ファッションは単なる流行ではなく「社会的現象」として論じるようになったことを紹介している¹²⁾。

他方アメリカでは、『ニューヨークタイムズ *New York Times*』誌が1966年3月1日「近頃は紳士ファッションと言えばカルダンの名を聞く」という記事を掲載した¹³⁾。

このように、1960年代はマスコミが男性ファッションに対する見方を変え始めた初期段階を象徴した時代であった。

また、日本においても、若者の間にカルダン信奉者が現れた。ファリッドによると、三島由紀夫（1925-1970）は1957年に「彼らは服飾の優雅さと、スタイリッシュに見える方法に取り憑かれている」と描写し、「日本のモッズスタイルは女性ファッションまでも圧倒し始めるのではないか」と感じざるを得なかった¹⁴⁾と述べている。

3 カルダンの影響力

パリでは他の高名なデザイナーもカルダンが開拓した道に続いた。

1926年から業界に君臨していた大御所 J・ランバン LANVIN, Jeanne (1867-1946)¹⁵⁾に加え、C・ディオール、ピエール・バルマン BALMAIN, Pierre (1914-1982)¹⁶⁾、ユベール・ド・ジバンシー GIVENCHY, Hubert de¹⁷⁾ (1927-), ギ・ラローシュ LAROCHE, Guy (1923-1989)¹⁸⁾ ルイ・フェロー FERÀUD, Louis (1920-1999)¹⁹⁾らが、パリを高級紳士既製服のメッカにすることに貢献した。パリのこの新しい動きは、イタリア人デザイナー、ニノ・セルッティ CERRUTI, Antonio Nino²⁰⁾も刺激し、1968年にはマドレーヌ広場 place de la Madeleine に店を構えた。そこからセルッティは自分のブランド名を使ったメンズウェアを発表した。その彼を援助したのは、カルダンとも以前働いた経験を持つロベルト・ブルーノ BRUNO, Robert という人物だったと言われる²¹⁾。

1960年代に活躍したイヴ・サン・ローラン Yves Saint-Laurent (1936-) は、1969年5月、rue de Tournon に「サン・ローラン・リヴゴーシュ店 Saint Laurent Rive Gauche」をオープンし、次の年に「ユニセックス・ルック」を発表した。ロシア風ベルト付きのギャバジンのサファリ・ジャケット、フラッペ・ベルベット製

のレースのセーラーチュニック、プリントクレープのシルクシャツ、そして縞のパンツだった。後に『エル Elle』誌で「ニューライン A new line つまり新たな制約を紹介する為ではなくすぐ前に起こった女性解放運動のように、束縛の鎖から男たちを解放するのが目的であり、女性が人形のような服を着て、男性が威圧する日々はもう終わった。今は、男女が単に平等であるだけでない。異性でありながら同時に似た性質を持てる時代なのだ²²⁾。」と語った。

そして、1971年サン・シュルプス Place Saint-Sulpice でのサン・ローランブティックが開店し、フランスの紳士服業者ビデルマン社 Bidermann との製造契約に基づいていた。

また、テッド・ラピドス TED, Rapidus (1929-)²³⁾は、商業的スケールとしては小ぶりであったが1960年代に名を成したもう1つのブランドである。1960年に、テッドはパリの16区のヴィクトール・ユゴー広場 Place Victor-Hugo にブティックチェーンの第1店を置き、1970年代までにはブティック数は30店を数え、他に国内と海外に約300箇所に販売店を配置した。

1960年から、即座に、シャルル・アズナブール AZNAVOUR, Charles (1924-)²⁴⁾、ロマン・ポランスキー POLANSKI, Roman²⁵⁾、ジャン＝ポール・ベルモンド BELMONDO, Jean-Paul²⁶⁾ ジョン・レノン LENNON, John (1940-1980) などのスターたちがラピドスの「自然な肩」やパディングが少ないことで知られる英国スタイルのプレーザーに惹かれてやって来た。彼らは後にサファリ・ジャケットやハイボタンのダブルのスーツも着こなした(図2)。

ラピドスは自身を「機械に美の言語を教える」ことを熱望する「スーツ・エンジニア」として売り込み、まもなくカルダンの小売り戦術を真似た。1964年にはラ・ベル・ジャルディニエール La Belle Jardinière と、ミラノの百貨店ラ・リナシャンテ La Rinascente やイタリアの衣服製造者と契約を交わした。ラピドスはま

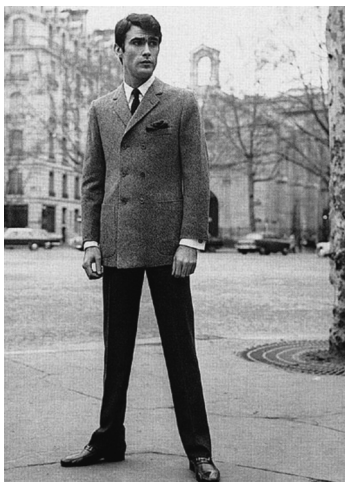


図2 ラピドスのスーツ 1966年頃

たビートルズの服を幾度かデザインし、ロンドンにある彼らのアップルブティック Apples Boutique にも服飾を提供したこともあり、ラピドスの評判はイギリス海峡を渡ったことになる。1969年にはジョン・レノンと共同で既製服ブティックチェーンをオープンする計画をも発表した。この計画は実現しなかったが、後にビートルズとテッド・ラピドスとの提携によるビー・テッド Be-Ted として知られるようになった²⁷⁾。

ちなみに、ラピドスは1966年から日本でもデザイン講座を教え、また、有名な顧客は天皇陛下の兄弟にあたる人もいた。

このようにまた、ラピドスもまたカルダンの影響を強く受けた一人であったとファリッドは、述べている。

メンズファッションは、劇的に変化にしていた。通常スタイルを伝統的に仕立てて来た洋服屋にとっては大きな損失となった。1955年の時点で、フランスにはまだ約10,000人の仕立屋がいた。それが1967年には2,000人に減り²⁸⁾、その傾向は業界全体の衰退を浮き彫りにする結果となり、それまで顧客はテーラーの仕事場を訪れ、生地を選択行程を観察し、服の合い具合を調節することで交渉した地元仕立屋

の影が薄れていったのである。

4 男性像の変化

1950年代後半になると、新たな男らしさが登場し、カルダンの行動に影響を与え、カルダンが更新させていくことになった。特に、大衆文化で代表されるアメリカでは映画の世界に「新しい男らしさ」が登場する。ジェームス・ディーン DEAN, James (1931-1955)、マーロン・ブランド²⁹⁾、エルビス・プレスリー PRESLEY, Elvis Aaron (1935-1977) らの容貌、身のこなしが当時の流行となった。このような映画スターを真似た行動やスタイルは理想の形態となり、彼らが着用していたジーンズ、Tシャツ、革ジャンといったラフなスタイルが強く見られるようになる。そこには、男は服にたいして「無頓着であることのよさ」がひとつの美意識として誕生し、男性の一般的な装いは、型にはまらない、どうでもいい、だらしなさが流行となった。以後、それまでのいわゆる伝統的な男らしさは崩れていく。

そして、1960年代後半に起こった「ピーコック革命 Peacock Revolution」により、メンズファッションの個性化、ファッション化の動きが見られた。また、ロゼルは、ユニセックスモードが登場し、例えばジーンズが一般化したことは衣服の面で明らかに男女平等が表面化したことの現われであり、フランスでは1965年以降、ズボンの生産量がスカートの生産量を上回っている³⁰⁾と述べ、例えば「ユニセックス、つまり性の平等は少年・少女の衣服をデザイン的に接近させるばかりか、男性のモードを変革させることになる³¹⁾。」というように男女平等の流れが男のモードを変えていく可能性があることは否めない。

そして男女平等が進むことで、男性は、失われつつある性を強調しようと試み、新たな男性性を表現しようとする。雑誌の広告などには男性が以前より取り上げられるようになる。そこには男性の裸体を取り上げられ、話題になった

例がある。1967年、パリの日刊紙や週刊誌『スリマイユ *Selimaille*』の男性下着の広告として裸の男性が写されていた。「今彼が服を着るには、黒い帯が必要である」とコメントが記載されている。男性スードを商品化した広告(図3)として、センセーションを巻き起こした³²⁾。写真は『ル・ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール *Le Nouvel Observateur*』誌の春の号である。身体を露出させるようになったことで、男の肉体に対して目が向けられるようになり、「オブジェとしての男性の身体」が出現したのである。

1968年、サン・ローランは「サファリ・ルック safari look」を発表し、ユニセックス志向をさらに強め、自らもモデルになった(図4)。また1971年の男性用香水「YSL プール オム YSL Pour Homme」の広告では、全身スードで登場し、話題を呼んだ(図5)。ひげはあるものの、長髪で体毛も見受けられず、贅肉はなく、筋肉の存在もない。細い体と緊張感のないポーズは男性的なイメージを感じることはできない。

そのほか、A・ウォーホル WARHOL, Andy

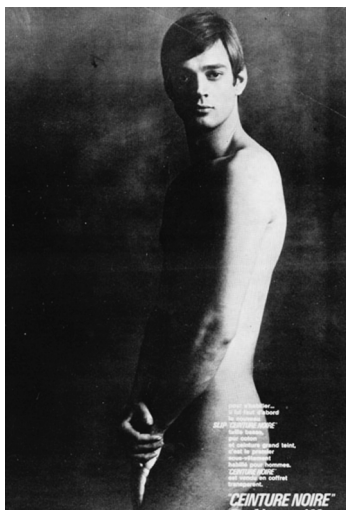


図3 『ル・ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール』誌 1967年

(1928-1987) の作品のモデルにもなるほど、ファッション誌以外のメディアに頻繁に登場する(図6)。

このように、男女平等化が進み、女性から性差をなくす動きが出てくると、男性は性を強調し復権を試みようとする。言い換えれば、これまでは男性社会であったから男らしさは語る必要がなく、そうでない社会になったゆえ、語られるようになった。

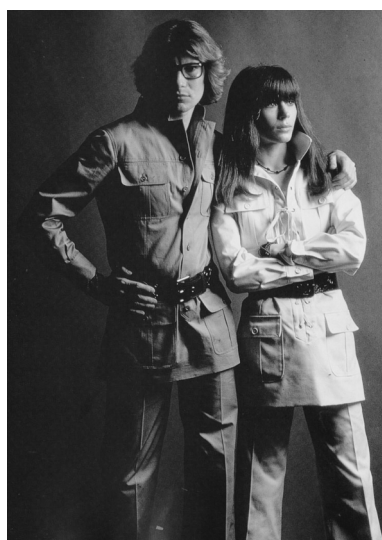


図4 イヴ・サン・ローラン サファリ・ルック 1968年

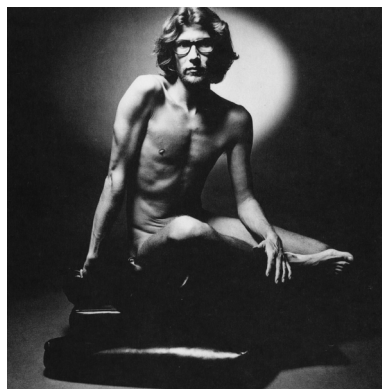


図5 「YSL プールオム」の広告 1971年



図6 ウォーホルの作品モデルとしてのイヴ・サン・ローラン 1972年

おわりに

冒頭でも触れたように、1960年代以前は、男性がファッションに興味を持つこと自体に様々な偏見があったことを考慮すると、カルダンの功績とは男性ファッションへの考え方を大きく変え、新たなスタイルによる既製スーツの美的若返りを試みた。そうした挑戦に挑むイニシヤティブは、1965年11月付『レクスプレス L'Exoress』紙上で「メンズファッション界のクレージュ」とも呼ばれた³³⁾。衣料産業も1980年代までに紳士服に少しずつ力を入れ始め、婦人服の既製服業界と同様、生産・流通・消費システムを築いていくこととなる。

カルダンは、また、新素材に常に興味を抱き、特に伸縮素材といった未来的なものを使用し機能性にも配慮した。

また、彼の成功の理由には、「シリンダーcylinder 円筒 (1960年)」「スティック stick (1962年)」「チューブ tube (1995年)」などコンセプトがはっきりしているネーミングにも見られる。

そして、カルダンのメンズファッションのデザイン改革の試みが、1960年代だけで消えてしまったのは、男性の反響が実際のところ、一

般化せず「宇宙時代」と呼ばれていた1960年代、男性層に意義ある装いを見出そうという試みよりも、デザイナーたちが創作しただけのものに留まった。しかし一方では、若者に大きくアピール出来たのが衿無しジャケットである。それもその時代のファッションを代表するというより、ビートルズの人気に負うところが大きいともいえる。そこには、1960年代の若者の影響力がメンズファッションの概念をも変えたと言える。

カルダンはメゾン経営でもファッション界では先んじていた。早々に事業家としての才能を発揮し、若者の動向や既製服が台頭する中で、積極的にプレタポルテに取り組んでいった。1954年若い女性向きのブティック「イヴ Eve」を118フォーブル・サン・トノーレ通り faubourg Saint-Honoré に開店した。次いで、1957年には男性向けブティック、「アダム Adam」を開店した。ジャン・マレー MARAIS, Jean³⁴⁾ (1913-)、マルセル・アシャル ACHARD, Marcel³⁵⁾ ら有名人が愛用した。それらは、オリジナルなカフボタン、シルクのベスト、そして、短くて幅の狭いウール、スエード、ベルベット製のエキセントリックなネクタイなどである。

さらに、安定経営を目指すカルダンは、早くからライセンス・ビジネスによる莫大な利益に着目し、「カルダン帝国」を築いていく。子供服、香水、家具、文房具なども手掛け、世界中でカルダン・マークの入ったものが出回るほどであった。日本でも最初に認知された高級ブランドとなっていた。ちなみに現在では、ワインや生活用品を含め、100カ国以上900に及ぶライセンスを取得している。

だが、数えきれないほどのカルダンの物が増えると、カルダンとしての個性が少しずつ不明瞭になっていく。とはいえ60年代から70年代の間、普通の男性に与えたピエール・カルダンの多大な影響は随所にみられた。男性をファッションの世界に導いたのは、1960年代の若者の影響力もその一因であろう。

以上、1960年代を中心としたカルダンの功績と男性性の変化についての論考である。今後は、カルダンのメンズファッションのクリエイションに対する考え、メディアの反応についての検証、カルダンに影響を受けたデザイナーたちのカルダン観、そして作品への実際の影響、そして、1970年代年代以降について、を課題としたい。

註

- 1) Colin McDowell, *The man of fashion*, Thames and Hudson, 1997, p. 145
- 2) J・パキャン PAQUIN, Jeanne 1869～1936年。フランスで生まれた。1891年にメゾンを創設し、1900年パリ万博では服飾部門総監督を勤め、パリでは当時最も有名なメゾンのひとつとなり、1956年にメゾンは閉店した。
- 3) E・スキヤパレリ SCHIAPARELLI, Elsa 1890～1973年。イタリア生まれ。1927年、「トロンプイユ」のセーターで成功し、オートクチュール界に入る。S・ダリ DALI, Salvador (1904-1989) らシュルレアリストたちとの交流があり、アートとファッションの融合したセンセーショナルな作品で知られ、1930年代を代表するデザイナーである。
- 4) C. ディオール DIOR, Christian 1905～1957年。フランス生まれ。1946年にメゾンを設立、翌年発表した「ニュールック」が大流行し、その後も「Hライン」「Aライン」など女らしいシルエットを次々と発表し1950年代モードをリードした。1957年に急死したあとは、サン・ローランが後継者となった。その後も1989年からはジャンフランコ・フェレ Gianfranco Ferré (1944-2007), 1997年からはジョン・ガリアーノ John Galiano (1960-) がデザイナーとなった。
- 5) ここで言う「デザイン概念」とは、カルダンが婦人服に見られる曲線やディテールのデザインのことを指すが、今後も検討課題である。
- 6) Farid Chenoune, *A History of men's fashion*, Flammarion, 1993, p. 271
- 7) ハーディ・エイミス Hardy Amies 1909年。イギリス生まれ。1946年にロンドンに出店しツイードのテーラードスーツを得意とした。1955

年に王室御用達を拝命され、1989年にエリザベス女王からナイトの爵位を受けている。

- 8) Farid Chenoune, op. cit., p. 276
- 9) *ibid.*, p. 277
- 10) *ibid.*, p. 277
- 11) CHANEL, Gabrielle 1883～1971年。フランス生まれ。1910年にメゾンを設立、下着素材のジャージや男子服からヒントを受け、第一次世界大戦後の女性にシンプルで機能的なスタイルを提案した。1954年に「シャネルスーツ」を発表し、世界的な流行となった。
- 12) Farid Chenoune, *A History of men's fashion*, Flammarion, 1993, p. 274
- 13) *ibid.*, p. 277
- 14) *ibid.*, p. 277
- 15) J・ランバン LANVIN, Jeanne 1867～1946年。フランスで生まれ、1890年少女と母親のために服を作るメゾンを開設した。没後もメゾンは継続し、総合ブランドとなっている。
- 16) ビエール・バルマン BALMAIN, Pierre 1914～1982年。フランス生まれ。1945年にメゾンを創設。1950年代にはパリ・オートクチュールの中心的なデザイナーとして活躍した。
- 17) ユベール・ド・ジバンシー GIVENCHY, de Hubert 1927年フランスで生まれ、1952年メゾンを設立した。オードリー・ヘップバーン Audrey Hepburn (1929-1993) の映画衣装を数多く手がけたことで知られる。1995年に引退し、メゾンは1997年からアレクサンダー・マックイーン Alexander McQueen (1968-) が後継デザイナーになっている。
- 18) ギ・ラローシュ LAROCHE, Guy 1923～1989年。フランスの既製服ブランド。1957年よりオートクチュールを設立し、1960年代に既製服にも進出した。
- 19) ルイ・フェロー FERÀUD, Louis 1920～1999年。フランス生まれ。1945年にカンスに店をオープンし、1960年代にはプレタにも進出した。絵画的な色彩が特徴となっている。
- 20) ニノ・セルッティ CERRUTI, Nino (1930-) イタリアで生まれ、祖父は1881年に創業した高級テキスタイル会社をバックに紳士服を発表した。1969年にパリに出店し、1976年から婦人服も手掛けた。仕立てが良く、上品な作品で定評がある。

- 21) Farid Chenoune, op. cit., p. 278
- 22) ibid., p. 278
- 23) テッド・ラピドス RAPIDUS, Ted 1929年～。
服飾デザイナー。パリで生まれ、仕立屋の息子だった彼は、フランスの学校で教育を受け、東京でも工芸系術を学んだ。1950年代初め、パリにブティックを開いた。彼のデザインだけでなく、裁断でも才能を発揮し、服はすぐに評判になった。60年代、サファリ・ジャケットなど男女どちらでも着こなせるユニセックスの服を製作した。紳士服、女性服両方のブランドを出した。70年代以降は、クラシックなものが中心になった。
- 24) シャルル・アズナブール AZNAVOUR, Charles (1924-) フランスのシャンソン歌手。
- 25) ロマン・ポランスキー POLANSKI, Roman 1933年～。ユダヤ系ポーランド人の映画監督。母親は第2次世界大戦中にアウシュビッツでナチスに虐殺され、自身もユダヤ人狩りから逃れるため転々とした。この体験が作品に深く影響している。1960年から70年代にかけて活躍し、それ以降は凡作が続いたが、「戦場のピアニスト(2002年)」で復活した。
- 26) ジャン＝ポール・ベルモンド BELMONDO, Jean-Paul 1933年～。フランスの俳優で、シリアスからアクション、コメディまで幅広く活躍している。
- 27) Farid Chenoune, op. cit., p. 277-278
- 28) ibid., p. 274
- 29) マーロン・ブランド Marlon Brando 1924～2004年。アメリカの俳優。「欲望と言う名の電車(1951年)」で注目され、このときのTシャツ姿が多くの若者に受けた。「乱暴者(1954年)」では、反抗的な若者を演じ、人気を不動のものとした。
- 30) ブリュノ・デュ・ロゼル, 西村愛子訳『20世紀モード史』, 平凡社, 1995年, p. 420
- 31) 前掲書, p. 421
- 32) 渡邊守章,『空間の神話学』, 朝日出版社, 1971年, p. 41
このセンセーションの内容がどういうものであったのか、今度の課題である。
- 33) Farid Chenoune, op. cit., p. 280

- 34) ジャン・マレー MARAIS, Jean 1913年生まれ。フランスの映画、舞台俳優。第2次世界大戦後のフランス映画で一時期を画した二枚目として知られた。ジャン・コクトー Jean Cocteau (1889-1963)に出会い、「美女と野獣」(1946年)「オルフェ」(1950年)などの一連のコクトー作品に主演した。
- 35) マルセル・アシャール ACHARD, Marcel 1899年～1974年。フランス出身の劇作家、映画監督、脚本家として活躍した。

参 考 文 献

- 1) Farid Chenoune, *A History of men's fashion*, Flammarion, 1993
- 2) Colin McDowell, *The man of fashion*, Thames and Hudson, 1997
- 3) Catherine Hayward & Bill Dunn, *man about town*, Lond., 2001
- 4) トーマス・キューネ, 星乃治彦訳,『男の歴史』, 1997年, 柏書房
- 5) ジョージ・L・モッセ, 細谷実/小玉亮子/海妻径子訳,『男のイメージ』, 作品社, 2005年
- 6) 伊藤公男,『男らしさのゆくえ』, 新曜社, 200年
- 7) 文化学園ファッション情報センター, SOEN-EYE 特集・デザイナー1 No. 17, 1995年
- 8) ブリュノ・デュ・ロゼル, 西村愛子訳,『20世紀モード史』, 平凡社, 1995年
- 9) 京都服飾文化研究財団,『身体 of 夢』, 1999年
- 10) 渡邊守章,『空間の神話学』, 朝日出版社, 1971年

図 版 出 典

- 1) Farid Chenoune, *A History of men's fashion*, Flammarion, 1993
- 2) Colin McDowell, *The man of fashion*, Thames and Hudson, 1997
- 3) Mode 1958-1990: イヴ・サン・ローラン展—モードの革新と栄光, セゾン美術館, 1990年
- 4) 渡邊守章,『空間の神話学』, 朝日出版社, 1971年